

# 平成28年度 県立ろう学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
<p>1</p> <p>教育課程 学習指導 生徒指導 進路指導</p> <p>(幼稚部) (乳幼児教室)</p>	<p>①主体的に人やものにかかわり、自ら表出できるように設定遊びの環境を整える。</p> <p>目標：個々に応じた言語力検査が、年度当初と年度末を比較し数値が上がる。70%以上</p> <p>②聴覚に障害のある乳幼児の育児やきこえに関する勉強会を行う。</p> <p>目標：保護者向け勉強会の実施。年6回以上</p>	<p>主体的に人やものにかかわり、思ったことや考えたことを表現できるような設定遊びを「毎回工夫することができた」「時々工夫することができた」と100%の教員が回答した。これは、事後の担当者会をほぼ毎回行い、振り返りと次の取組について話し合いを行うことで、教員一人一人が幼児の実態に応じた環境の工夫について考えることができたためと思われる。また、保護者についても、全員が、自分から人やものにかかわって遊ぶことが「とても増えた」または「増えた」と回答していた。これは、学校で毎日子どもと一緒に遊ぶことで、子どもの変化を日々実感することができたためと考える。</p> <p>検査結果については、全員の言語力の数値が上がっていた。これは、設定遊びの環境整備を工夫したことにより、ことばで表現する力が向上したことに加え、設定遊び以外の活動も、言語力の発達に大きく影響していると考えられる。今後も、よりよい環境を準備するために担当者会を継続していくと共に、設定遊びにおける、幼児一人一人の人やものへの</p> <p>保護者へのアンケートではA「十分役立った」71%、B「役立った」29%で、全員が概ね満足した結果となった。これは健聴の保護者が難聴体験をしたり、汗や水に触れる機会が増える夏になる前に補聴器の手入れの仕方や、子どもの発達の状態に合わせた接し方のコツなどを話題として扱ったりしたことがタイムリーで分かりやすかったと考えられる。また、保護者からの要望に応じて先輩保護者との座談会も行うことができた。今後も、保護者の子育てや難聴理解に役立つような学習会を継続して行っていきたい。</p>	<p>設定遊びの環境をよりよく整えていくためには、教師自身も遊び方の工夫や広げ方などについて学ぶ必要がある。また、事後に行う担当者会では、環境の整え方だけでなく、幼児一人一人が主体的に人やものに関わっているか、自己表現できているかという視点での意見交換も行っていきたい。一方、言語力の評価については、設定遊びを通して個々の受容や表出について評価できるような観点を設けたい。</p> <p>今年度は1歳児集団活動に合わせて定期的に学習会を行った。その理由として、1歳児は補聴器装着して間もないお子さんを持つ保護者が多く、子育てや難聴理解のための時間が十分に必要だと考えたからである。今年度の成果を踏まえて、今後は他の年齢の集団やこれからの新規相談の際にも、様々な機会を捉えて学習会を行うことを検討していきたい。</p>
<p>2</p> <p>教育課程 学習指導 生徒指導 進路指導</p> <p>(小学部)</p>	<p>①本に親しむための活動や行事等の工夫を行い、家庭読書を推進する。</p> <p>目標：本を読んだり読み聞かせをしてもらったりする等で、家庭で本に触れる。80%以上</p>	<p>本に親しませ、読書への意欲を高めるために、週に1度本の貸し出し・一斉読書、チャレンジ読書（教員が選定した本を読む）、児童による「おすすめの本の紹介」、各学級での読み聞かせ、成人ろう者による読み聞かせの実施、キッズニュース（まんが・行事や季節等に関すること）や子ども新聞の掲示等を行った。また、家庭読書につなげるために月1回読書だより（「おすすめの本の紹介」の様子・学年に応じた本の紹介・読書啓発）を発行し、学期に1回（10日間）家庭読書記録を保護者に記入してもらった。児童は本を借りることや読み聞かせを楽しみにし、休み時間等に本や掲示物等を読んでいる姿が見られた。また、成人ろう者による読み聞かせや児童による「おすすめの本の紹介」は、児童が新たな本を読みきっかけとなった。</p> <p>教員の90%が本に親しむための活動や行事、家庭読書を推進するような内容を考えたり工夫したりすることが「十分できた・おおむねできた」と回答した。保護者は、9名中2名（22%）が本を読むような働きかけを「おおむねできた」と回答し、7名（78%）は「あまりできなかった・ほとんどできなかった」と回答した。児童の6名中、高学年の3名が「家庭で本を読んだ」と回答し、低学年の3名は「あまり読まなかった・読まなかった」と回答した。</p> <p>高学年は自分で本を読むことができるが、低学年は自分の読みたいと思う本を一人で読むことが難しいため家庭読書がすすまなかったと考えられる。学期に1回ずつ実施した家庭読書記録では、9名の内6名が10日間で7日以上・2名が5日、自分で本を読んだり、読み聞かせをしてもらったりし、十分家庭で読書を行っていた。継続的ではないが、ほとんどの児童が家庭読書をよく行い、保護者も積極的に働きかけを行っていたと思われる。アンケート結果が低かった理由として、「年間を通してではなく、アンケートを実施した時点のことのみで回答したため」「保護者は子どもに本を読ませたいと考え、もっと働きかけが必要だと考えているため」ということが考えられる。</p> <p>児童の読書への意欲は高まっており、学校での取組をどのように家庭読書の習慣化につなげていくかということが課題</p>	<p>自分で本を読むことができる児童には読書の幅を広げていけるような活動、自分で本を読むことが難しい児童には内容を知っている本を増やす、本を読むことが楽しい、面白いと思えるような活動等、個々の発達段階に合わせて読書をしたいという気持ちを育てるための活動に学部全体で取り組む。</p> <p>家庭での読書をすすめていくために、保護者から家庭読書の様子や家庭読書に対しての考えを聞き取り、個々に応じた家庭での本への親しみ方（本の選び方や読み方、読み聞かせ・手話を使つての読み聞かせ、調べ学習での本の活用、地域図書館の活用、家庭内の読書環境設定等）について考え、保護者と連携しながら家庭での読書をすすめる。</p>

<p>3</p> <p>教育課程 学習指導 生徒指導 進路指導</p> <p>(中学部) (高等部)</p>	<p>①自立に必要な学習内容や学習方法の気付きを促し、目標を設定する。</p> <p>②生徒の目標に応じた課題を工夫し、家庭学習の習慣化を図る。</p> <p>目標：適切な目標の設定、意欲の向上、保護者との連携、効果的な手だてなどを考え、実施する。80%以上</p>	<p>「自ら学ぶ態度の育成に努め、自立に必要な学力の定着を図る」ことを重点目標に据え、中高教職員全員が生徒に自主学習への励ましの声掛けや見守りを行うことにした。そして、生徒1人に対して教員2人体制でチームを組み、生徒と相談しながらやる気を持って取り組める自主学習の目標を設定し、家庭学習の習慣化を支援した。</p> <p>モチベーションを高めるための支援方法として、「チャレンジノート」という形で課題を提出しポイントをためる方法を探ったり、「チェック表」を作成して到達度を振り返ることができるようにした。一人一人に応じた支援方法を工夫して実施した。</p> <p>その結果、94%の中高等部教職員が、「学習内容や学習方法の気付きを促し、目標を設定することが、十分あるいはおおむねできた」と回答した。また、89%が「生徒の目標に応じた課題を工夫し、家庭学習の習慣化を図ることが、十分あるいはおおむねできた」と回答した。このことから、教職員が高い意識を維持して自主学習への支援に取り組むことができたことがうかがえる。</p> <p>また、91%の中高等部生徒は、「目標の課題に自主的に取り組み、提出することが、できたあるいはおおむねできた」と回答し、週5日～3日は自主学習課題に取り組んだことが分かった。また、81%の生徒は、「自分の目標を十分達成できた、あるいはおおむね達成できた」と答えた。</p> <p>一方、保護者に対しては、1学期末懇談会で、学習内容の定着や目標達成に向けての努力の必要性を伝え、家庭での励ましの声掛けを依頼し、協力を仰いだ。また、2学期末懇談会で、生徒の自主学習課題への取組の様子を具体的に伝え、成果や課題を示した。</p> <p>しかし、「子どもの家庭での学習時間が増えた」と答えた保護者は55%しかおらず、45%は「学習時間が変わらなかった。あるいは減った」と回答した。また、「長時間の集中が続かないため、見ている側としては身に付いているかどうか毎回不安だ」という意見があった。</p>	<p>家庭学習が継続的に進められるように、一人一人に応じた具体的な課題や手だてを工夫し、チームを組んで支援したことが功を奏し、大半の生徒の意欲を喚起し、習慣化を図ることができた。今後もチャレンジノートやポイント制など意欲喚起に有効だった手だてを全体に広めて、自主学習支援の取組を継続していきたい。</p> <p>一方で、保護者が子どもの取組を十分だと捉えることができなかった点が課題として挙げられる。今年度の質問が「学習時間」を問うものだったため、自主学習の質や内容を保護者が認識しづらかったように思われる。今後は、生徒の頑張りや定期的な保護者の目に触れるよう、保護者用の自主学習チェック表を作成し、週に1度検印を得るなどして、理解を図っていききたい。また、自主学習時の家庭での見守りや声かけなどの協力も得ていきたい。</p>
<p>4</p> <p>安全指導</p> <p>(指導・保健部)</p>	<p>①避難訓練の内容を検討し、実践的なマニュアル作りを図る。</p> <p>②緊急時対応訓練を実施して、医療的ケアにおける緊急時対応の改善を図る。</p> <p>目標：緊急時の対応マニュアルを理解し、適切な対応ができる。70%以上</p>	<p>災害や不審者侵入、医療的ケアの必要な児童の事故発生等、緊急時における対応の流れや全職員の共通理解を図るため、様々な実践的な場面を想定した訓練を実施した。</p> <p>結果、避難訓練(火災・地震)に危機意識をもって取り組むことが「できた」「おおむねできた」参加者の割合は95%となり、目標の80%を越えた。また、医療的ケアに対する緊急時対応訓練に危機意識を持って取り組みことが「できた」「おおむねできた」と回答する割合が100%となった。このことから、緊急時対応訓練に関して高い意識をもって取り組んだことがうかがえる。</p> <p>火災や地震、不審者対応訓練に関しては、消防署・防災アドバイザー・警察等外部の助言を受けて実践的な訓練をし、事後アンケートの回答を受けてよりよいマニュアル作りを図った。</p> <p>医療的ケアの緊急時対応訓練は今年度2回実施し、その都度関係教職員で協議をした。事後アンケートも参考にして、さらに実践的な対応マニュアルにするための改善を繰り返し図っている。</p> <p>これらの取組の成果として、避難訓練や医療的ケアの訓練等を通して、今後危機的状況の時、自分の役割を理解して行動することが「できるようになったと思う」「おおむねできるようになったと思う」教職員が97%となり、目標の「緊急時対応マニュアルを理解し、適切な行動ができる70%以上」</p>	<p>今年度の緊急時対応訓練は、より実践的な訓練を実施し、教職員一人一人が自分の役割を理解して行動できるようになったと考える。しかし、実際に災害や事故等が発生したときはマニュアルどおりに行動できないことが多く、臨機応変に判断することが必要となる。緊急時対応訓練の実践的な訓練をどのように実施するかが検討課題となる。</p> <p>医療的ケアの対応訓練では、当該学部のみならず他学部の協力を得て、対象児童にいつ、どこで事故が発生しても対応できるように全職員の共通理解と周知徹底を図る必要がある。</p> <p>今後も対応訓練を繰り返し実施して、災害や事故発生等、緊急時における対応の流れの全職員の共通理解(緊急時対応マニュアルの確認と救急体制の周知の徹底)を得て、より実践的なマニュアル作りを図りたい。</p>
<p>5</p> <p>組織運営</p>	<p>①職員会議や運営委員会などの効率的な運営を図る。</p> <p>目標：運営委員会、職員会議の所要時間を昨年度より削減する。10%以上</p> <p>②各種委員会の構成員を見直し、必要最小限の構成員による効率的な運営を図る。</p>	<p>取組については、運営委員会の前に校長ヒアリングを「必ず行った」「概ね行った」主任の割合は、合計で100%となり、目標の90%を越えた。また、主任以外の職員は、職員会議の前に「必ず資料に目を通した」「2回に1回程度目を通した」を合わせると、82%となり、目標の70%を越えた。これらの取組については、概ね良好に行われ、会議の効率的な運営に寄与したと考えられる。</p> <p>成果としては、職員会議の時間が、昨年度との比較が可能であった9回の職員会議のうち、8回は、昨年度よりも13%～41%削減され、積算時間の比較では、35%削減された。そのことにより、職員会議において、幼児・児童・生徒についての情報交換が時間内に十分可能となり、職員全員が他学部を含めた全幼児・児童・生徒をより深く理解することにつながったと考える。</p> <p>しかし、運営委員会の会議時間については、9回のうち5回は10%以上削減されたものの、4回は増加し、積算時間では3%増加した。運営委員会では、体育館改修に伴う行事の見直しなど、例年になかった新たな議題があり、十分な審議が必要となったため時間を要したと考える。</p> <p>満足度指標については、「概ね効率的に運営された」「やや効率的に運営された」を合わせると89%となり、目標の70%を越えた。</p> <p>各種委員会については、運営委員会で諮って内規を改正し、現状に合わせた必要な構成員に変更した。</p>	<p>今年度は、職員会議の時間が大幅に減少したことで、効率的な運営の満足度につながったと思われる。会議の前に、その内容について周知を図ることで、会議前に疑問点等があれば予め主任に聞いて解消したり、問題点を整理したりしておくことができる。また、会議にも受け身ではなく、能動的に参加でき、より意味のある審議ができ、効率的な運営につながると考える。そのためにも、今後もできるだけ早く資料を準備して、事前に協議事項について周知をする努力をしたいと考える。</p> <p>さらに、連絡事項については、これまでもガルーンを活用してきたが、今後もさらに活用し、会議時間の削減につなげていきたい。</p> <p>運営委員会の会議時間については、新たな議題を提示する際、内容の理解に時間がかかって会議が長びきがちであるので、事前に関係部署との連携を丁寧に行ったり、周知を図ったりするなどの改善策を検討したい。</p>